

雑誌『少年園』における「少年」

— 論説欄を中心に(1) —

酒井晶代

〈1〉

一八八八(明治21)年一月三日、雑誌『少年園』が創刊された。木村小舟は、明治少年文学の発生と変遷を著した『少年文学史 明治篇』のなかで、同誌の出現を次のように評価している。^(注1)

明治初期に登場した少年雑誌が、漸く作文本位の旧套を脱却して、学問、修養、娯楽等の健全なる総合記事に重点を置き、而も当代一流の知名大家の寄稿を蒐めて、誌面の大部分をこれに充て、僅かに一少部分を少年の投書に割り、恰も現代盛行の少年雑誌に類する進歩的体裁を備うるに至つたのは、即ち、明治廿一年以降の新現象にて、これが先驅をなせる者は、実に山縣悌三郎の主宰せる新雑誌「少年園」であつた。

引用中「総合記事」とあるように、「少年園」の誌面は、「少年園」

〈学園〉〈文園〉〈譚園〉〈叢園〉〈芳園〉の六つの欄から構成されており、「穎才新誌」(明治10年創刊)をはじめとする、従来の作文投稿雑誌にはない清新さを持つていた。徳富蘇峰によつて創刊(明治20年)された「国民之友」に倣つたとも、また、イギリスの少年雑誌「リトル・フォークス」に影響を受けたとも言われるこの「進歩的」な誌面構成は、以後、中央・地方を問わず、相次いで創刊される幼少年雑誌のモデルとなつていく。^(注3)

加えて、同誌にはもうひとつ、はつきりと印付けられた新しさがあつた。それは、雑誌のタイトルに用いられた「少年」という語である。先の「穎才新誌」をはじめ、「新聞小学」(明治8年創刊)や「小学教文雑誌」(同12年創刊)など、先行誌において、誌名に「少年」という語が用いられている例はほとんど見られない。ところが、「少年園」の登場以後、「日本之少年」(明治22年創刊)、「少年文武」(少年之友(いずれも同23年創刊)のように、「少年」向きを謳つた雑誌が頻出し、「少年雑誌」は、にわかにジャンルとして顕在化していく。その後、

九五(明治28)年の『少年世界』登場に至って、「少年」の語は、少年雑誌のタイトルに不可欠な記号として定着するのである。

もちろん、一八八八年当時の、「少年」という語の概念や、そこから喚起されるイメージが、現代のそれと大きく隔たっていたことは言うまでもない。桑原三郎は、『少年園』創刊の頃の「少年」は、英語の youth & young man に相当する国語であり、今日の青年学生といった響きをもっていたと述べている。^(注4) また、田嶋一は、「中年」と組になった伝統的な概念・用語としての「少年」が、近代的な「少年」概念に置きかわり、確立された時期を一九一〇年前後に見出すと同時に、その前提条件として「青年」概念の成立と定着を指摘している。^(注5) 一方、木村直恵は、〈政治的实践〉という視点から明治二〇年前後の「壮士」「青年」「少年」概念を分析した著書のなかで、『少年園』こそが、政治色を払拭した新しい文脈で「少年」という言葉を用いた嚆矢であり、同誌を通して「非政治的」で「主体性を欠落させた主体」としての「少年」概念が定着していった可能性を示唆している。^(注6)

伝統的なイメージと、西欧文化の影響を受けた新しいイメージとが混在する形で「少年」という語が用いられていた当時、同誌では、「少年」という言葉に、どのような理念や価値観が託されたのだろうか。また、『少年園』の読者たちは、この雑誌から何を受容して、「少年」という「新しい」人々になっていったのであろうか。「少年園」創刊後の一八九一(明治24)年には、博文館から〈少年文学〉叢書が

刊行される。「少年文学」ないしは「児童文学」というジャンルの生
成も視野に入れながら、「少年」が見い出され、形作られていく過程を、
雑誌の巻頭を飾り、読者にとりわけ愛読された^(注7)とされる〈少年園〉欄
(論説欄)を主な手がかりとして検討していきたい。

〈2〉

本稿では、一八八八(明治21)年一月三日発行の『少年園』第一号から、翌八九(同22)年一〇月一八日発行の第二巻第二四号までの一年間、計二四冊を検討の対象として、雑誌創刊時における「少年」の諸相を整理することを試みた。

第一号巻頭には、創刊の辞にあたる「発刊の主旨を述べ先づ少年の師父に告ぐ」^(注8)が掲げられている。「我邦教育の新太陽は明治維新の暁鴉聲裏に微白を生じてより、未だ幾ならざるに既に早三竿の高きに昇り、宿霧深くして文明の暁を覚えざりし山間の村落も處々に啼鳥を聞くに至れり」の一文にはじまるこの文章は、漢文脈のレトリックを駆使しながら、学校生活を謳歌する学生たちを高らかな調子で紹介していく。

小西湖の西、高林鬱蒼の間に煉瓦の巨堂宏壮の光を放つは是れ帝国大学なり。小赤壁の北、清流一帯の上に花崗の石室十丈の影を倒にするは是れ高等師範学校なり。農林学校は遠く駒場に風塵を避けて汽犁、

馬耕に国光の根柢を培ふ。高く浅草の天に煤煙を抹するは是れ職工学校なり。遙に東台の風に鸞鳳の聲を弄するは是れ音楽学校なり。高等女学校は天女パラスの美を養ひ、美術学校は神像ゾオイスの真を写し、高等商業学校は神田に第一高等中学校と相對し、慶應義塾は三田に独り自由の色を占め、其他官立と私設とを問はず其名の世に知られたるもの百を以て数ふべし。

「我邦教育の新太陽」の語に呼応して、在京の学校は、「光」と「影」を駆使したきらびやかな言葉で彩られる。「高」「遠」「天」「遥」といった言葉の繰り返しは、「新太陽」が育もうとする高い理想を表現したものと読み取れよう。引用部分に続いて、そうした東京の街を徘徊する「青年学生」の様子が紹介され、その後によく「中学以下の教育」とその対象となる「少年」が登場する。理想的な未来像から遡行する形で「少年」がクローズアップされるのである。

五畿八道三府五港、北は蝦夷六出の銀世界より南は琉球芭蕉の緑天地まで、数百の中学数千の小学数十万の生徒ありて復た教育の普及せざる處なし。殊に近來中小学の教育は種々の方面より改良の門を敲き進歩の路を拓きて、校長の氣質は無言にして能く少年を感化し、教師の授業は自然にして能く智力を啓発し、(中略)實に之を欧米文明国に比ぶるも敢て一步を譲らざるなり。

引用のなかで「少年」は、「中小学の教育」において、教師の「感化」

や「啓発」を受ける人々として捉えられている。ここでは「少年」が、何よりもまず、学校という学びの場に位置付けられる点に注意しておきたい。創刊の辞では続いて、「家庭教育」「社会の教育」「印行書類の教育」の重要性を述べ、「少年園」は、現在の教育界でまだ遅れがちな「印行書類の教育」を担うものとして出発する、と宣言する。学校、家庭、社会——少年を取り巻く「教育」の網の目を、より緻密なものにしていこうとする意図と、その手段としての雑誌。「予輩は一に今の少年諸君中小学の生徒諸子に向て大に望を属するものなり、明治の教育が如何なる美大の果を結ぶや一に諸子の未来に之を見んと欲するものなり」。東京での華やかな学生生活や立身は「未来」へと先送りされ、「少年」は、未だ実を結ばざる者¹¹途上にある者ゆえに、学校でも、家庭でも、社会でも「師父」の保護を受けるべき「可愛の少年」、すなわち、「教育」を授けられる人々として現われてくると言えよう。

続いて、創刊号の〈少年園〉欄には、「少年」読者に向けて発刊の主旨を述べた巻頭言「天長節を祝し開園の緒言とす」^(注9)が掲載されている。

今日は是れ我々日本人三千八百万の人民が最もめでたき日なりとして、謹て宝祚の無窮聖寿の万歳を祝し奉る天長節なり。都も鄙も一樣に明治の御代を祝し奉る無二の佳節なり。

「我々」「様に」という言葉が用いられていることから伺えるように、冒頭で強調されるのは、「明治の御代」の「日本人」という同一性である。「都」と「鄙」の地域差は、「明治」という時間、「日本」という空間が意識される「天長節」によって、無化されている。そうした同一性が強調された後、「少年」が次のように位置付けられる。

三千八百万の兄弟姉妹が斉しく万歳を唱へ今日の佳節を祝する中にも、特に目出度く思ふは少年の人々なるべし。他なし是れ明治の日光之を孕み、明治の煦温之を暖め、明治の御代に成長せる明治の御代の新民種なればなり、其悦びの他よりも一層深きことを知るべきなり。

「少年」は、暖かな「日光」や「煦温」を受けて「成長」する「明治の花」に譬えられる。創刊の辞では将来の「美大の果」がクローズアップされたのに対し、巻頭言では「花」である「少年」たちの現在が、「幸福」「快樂」という言葉の繰り返しで彩られていく。上野墨院の公園、博物館や動物園、回向院の大曲馬など「都下の少年」の「快樂」と、山の菌花、川の小魚、隣村の伯父宅への訪問など「地方の少年」の「快樂」が列挙され、「田舎には田舎の快樂あり、都会には都会の快樂ありて、今日の佳節に酬ひ幸福を享くるに於て敢て異同なし」と結論されている。ここでの「幸福」や「快樂」が、「教育」の範疇内での「幸福」「快樂」であることは言を待たない。巻頭言での「少年」は、そうした「教育」を享受できる人々であり、雑誌という「一大方便」は、その「快樂」をさらに増幅する装置として位置付けられる。

此の少年園が今日を以て無上の吉日とし其第一号を発刊したるは幸に此の一方便となり、都下の少年と地方の少年を相会せしめ、是より長く懇親の端を開きて此の少年園の園友たらしめんと希望したるに在り。

少年園は既に今日の初刊に於て一万二千の冊子を印刷し、一万二千の園友諸君と初て相見るの栄を得たり。一万二千の少年諸君は今日初て此園中に会し、互に握手相賀するの快樂を得給へり。

「少年園」は、明治の近代的な「教育」の対象者たる「少年」たちが、地域差を越えて懇親し得る場として出発することになる。「明治の少年諸君、願くは来り遊べよ、来り楽めよ」——大人たちによって設営された「園」は、学びの場であると同時に、安全な遊びの場でもある。こうして、「少年」は「相会せしめ」「園友たらしめん」(傍点引用者)とする大人たちの配慮の中から現われてくる。

〈3〉

創刊号から第二四号までの間に、〈少年園〉欄に掲載された論説は、三七編を数える。^{注10)}以下、先の創刊の辞ならびに巻頭言とも関わらせながら、「少年」の諸相を大きく五点に整理し、考察していきたい。

まず第一に、「少年」という言葉が指し示すものが未だ曖昧であった点を確かめておきたい。例えば、第二号「少年の時機」(田中登作)^{注11)}

において、筆者は「少年といふは、如何なる時期のものを指し、その才智識は如何なる程度まで進みたるものを称するにや」と問いかけ、「少年園」創刊時の広告文をもとに、「十歳より十五六歳までの児童」と判断して、「少く少年と云ふ意味を解せしやに覚ゆ」と述べている。「少く」という言葉に着眼すると、「十歳より十五六歳まで」を「少年」とするのは、当時にあつて、やや異質な見方であつたのだろう。また、この論説では、以上のように定義した後、「人誰か少年時機の経験なからんや。この経験なくして一人前の男子たらんと欲するも得べからず」のように、「一人前の男子」の途上にある者、として「少年」を再定義し、維新前後の教育と現在の教育との比較論を展開している。教育という主題を明確に意識することによって、冒頭で表明された「少年」概念の曖昧さは解消されている。

『少年園』創刊時の広告文は、同じ第二号の「園話／第一回、身体の鍛練」(無署名)^(注12)の中に紹介がある。「少年園は其美花の如き新雑誌なり、將に天長節を期して世に出でんとす。此の少年園は自から任じて日本少年の進路を示さんとする者にして、完全なる教育を以て目的とせり」「教育上に資して以て益あるものは皆悉く之を網羅し、百花爛漫たる此の少年園中に収めんとす」のように、それは、先述の創刊の辞と同様、教育性を前面に押し出したものであつた。

第二には、「少年」の今を規定するものとして、「未来」という時間が頻繁に用いられることに着目しておきたい。第二号「現時ノ少年ニ望ム」(国府寺新作)^(注13)は、「少年諸子ニ最モ望ムモノハ花ニアラズシテ

寧口其实ニ在リ」「少年諸子ニ望ムモノハ爛漫タル艶花ヨリハ碩然タル果実ニ在リ」とし、その点で「我國現今ノ少年ハ、実ニ不幸ナル時機ニ遭遇シ、不幸ナル境界ニ沈淪セルモノナリ」と述べる。そして、東京に遊学した少年たちが「看護」や「勤慎」に欠けるがゆえに、「政治談」「淫猥ノ俗話」に染まり、「放逸游蕩ノ怪物」となる様子を嘆いて、次のように訴えている。

嗚呼世ノ父兄タル者未タ独立スル能ハザルノ少年ヲ放テ之ヲ此中ニ入レ怙トシテ怪マズ何ソ其残忍ナルヤ、少年諸子ガ不幸ナル、豈焉ヨリ甚シキモノアランヤ。少年諸子ハ実ニ未来ノ英雄、未来ノ碩儒、未来ノ聖人、未来ノ名工巨商ナリ。而シテ今其看護後見其宜キヲ得ザルヲ以テ、將ニ将来ノ蕩子、将来ノ惰夫、将来ノ兇徒惡漢タラントス、人生ノ不幸豈焉ヨリ大ナルモノアランヤ。

教育制度は、「小学ヨリ中学大学ニ至ルマテ整然樹立百事整頓」されつつある。しかし、上京した「少年」たちは、都会の自由な空気の中なかで、またたく間に悪風に手を染めてしまう。筆者は「父兄」の自覚を説きながらも、結局のところは少年自身の心がけ次第であるとして、彼らの「奮発」を促している。親や共同体への不信と、「少年」の自覚が強調される背後には、「儆倅」と「受験」の間、「中央」と「地方」の間、「大人」と「子ども」の間^(注14)を行き来する当時の「遊学少年」たちの姿が見えかくれする。流行を追い、成功を急いで、早く一人前になりたいと願う者は諫められ、「少年」は、「未来」を担う、曖昧で、

宙ぶらりんな存在として位置付け直されていく。

「現時ノ少年ニ望ム」においては、抽象的な表現にとどまっていた「未来」であるが、号を追うにつれて、その具体像は明確になっていく。第七号「功名富貴の原野」(無署名)^(注15)では、「政治社会」だけが活躍の場ではないとして、「就中余輩が少年諸君に希望する所のものは、彼の理科の世界の功名なり、彼の物質的文明の勝利なり」と科学の世界へ「少年」を誘うとともに、「理科」とならんで「農業」「工業」の発展を彼らに託している。また第七号、八号に連載された「日本少年の為すべき事業」(志賀重昂)^(注16)においても、「医師」「軍人」「農業者」「工業者」「土木事業家」「地震学者」「植物学家」「貿易家」などが挙げられ、政治以外の分野での立身が盛んに説かれている。

第三には、先の「未来」を担う者という点とも関わって、「少年」の「成長」「発達」が繰り返し強調され、細分化されていく点を指摘したい。

第三号「少年園記者ニ謀ル」(手島精)^(注17)では、「少年ハ智見広カラズ事理ヲ判断スルコト大人ノ如クナラズ」という認識のもと、少年にふさわしい書籍として「娯楽ノ記事多クシテ智識を増進シ。修身立志等ニ益シ、或ハ理科ニ亘ルノ事項ニシテ識ラズ知ラズノ間ニ其理想ヲ発達セシムルノ書」が提案されている。大人のように「事理ヲ判断スルコト」ができない「少年」の、「発達」にふさわしい書籍は、「大人」によって選択されなければならないと説かれるのである。

手島の論を受けて、記者は末尾で『学校家庭遊戯全書』の出版計画

を打ち明けているが、さらに第五号「少年園の先途」(無署名)^(注18)には、雑誌出版以外の「少年園」の全体構想が予告されている。五つの段階からなるその構想とは順に、「少年書類(小説伝記其他遊戯書等)」の編纂出版、「少年図書館」の設置、「貧困」なる少年たちへの「学資の補助」、「寄宿舎」の建設と「私立学校」の設立であった。雑誌や図書の発行から学校の建設へ、「少年」を保護し、教導し、発達させる「完全なる教育」(「少年園」広告文)が計画されていたのである。

第三号と第五号の二回に分けて連載された「少年の心に於ける『宇宙』の変遷、并ニ危険なる『宇宙』」(坪内雄蔵)^(注19)は、発達の途上にあるものとして「少年」を位置付けただけでなく、生活圏の広がりに着眼して、その段階と心性とを時間順に説いた点で興味ぶかい。

この論説は、「父母の身のまはり又は叔母叔父の身のまはり」が宇宙Ⅱ世の中の全てである「三四才の小児」から語りおこされ、続く「少年」の時代を、具体例を挙げながらいくつかの段階に細分化して把握していく。「自在にわんぱくをなし勝手に我侪を言ひ生意氣と叱られ、面憎しと嫌はれ、いたづらツ子となり、お先走りと化し、遂に餓鬼大将と崇めらる頃」の「少年」の世界には、「学校の先生、隣家の主人公若くは禿頭の学務委員」「八字髭の官員さま」や同年代の友人などが加わり、「競争心」という「新思想」が芽生える「第一段階」。次に、「新聞雑誌等を読み、甲の組の先生に相似たる人否先生にも優れる人、天下に幾十人あるを悟るようになると、「少しばかりシヨゲかへりて」「暫らくは謹慎して修行する」(「第二段階」)。そして、「小学を卒業して或は地方の中学校に入り、或は英学の私塾などに入り、更に高尚な

る学海に向って講学の棍を転じ」る頃になると、書物や雑誌から得た知識によって「少年」の世界は一気に拡大するがゆえに、「雄偉なる問題」に頭を悩ませることとなる(第三段階)。筆者は、この第三段階こそが「少年の最大クライシス」であるとして、落胆せず、また奮発による暴走も不可として、「おのれの値打」を知ることが大切であると説く。

筆者は続いて、「少年」の「自信」は、「他信」の変形に過ぎないとして、「一旗幟を樹てん」とする「政事界の壮士」「文学界の才少年」たちを厳しく批判している。「自家の価値」を見定めるためには、「古今の実例を相比較し、公平なる眼を開いて我と彼とを対照」させることが必要であり、「十有五六才に至るまでの間に果して幾許の経験をしてし得ん」として、成功を急ぐことは厳しく戒められる。ここでの「少年」は、「其耳目の及ぶところ年齢と場所とに限らるゝ」者たちであり、「年齢と場所」が段階毎に細分化されたことによって、「後代に適応すべき武器兵糧を蓄へ」るべく勉学に勤しむ者としての側面もまた、より強固なものになっている。

また、「発達」を促し、「未来」を担うものとしての、「少年」のエネルギーへの着眼も見逃せない。第一〇号「少年の気象」(無署名)では、「唯一念の動くまゝに直行して常に活発々地なるは是れ少年血気の常なり」として、「他日成年に及んだ時に大事業を成し遂げるエネルギーを、彼らの「敢為の気象」の中に見出ししている。

一方、「発達」の途上にある「少年」は、同時に未熟な存在であり、保護の対象となるべき人たちでもある。創刊の辞において、「師父」の保護を受けるべき「可愛の少年」が強調されていたことは先述の通りであるが、号を追うにつれて、さらに無邪気さや神聖さを帯びた「少年」が現われてくる点にも注意しておきたい。

第二号、一四号、一五号と三回にわたって連載された「壮士、青年、少年」(末兼八百吉)は、「壮士」「青年」という年長者たちと「少年」との比較を通して、「少年」の位置を定めようとした論である。筆者は「遊学」と「通学」、つまり「学校生活」を送る者として「少年」を定義し、次のように締めくくっている。

且つ夫れ諸君の心緒の淡泊、無邪気にして、少しも浮世の情慾に意なきものは、余輩をして真に諸君を敬愛せしむるものなるなり。看よ諸君は敢て黒田伯、大隈伯の富貴を羨望せざるなり。後藤伯、板垣伯の名譽に眩惑せざるなり。谷伯、西郷伯の功業に心酔せざるなり。隣家の千両箱は、諸君が算術問題を解くに於て何かある、青年者の幸福なる婚姻譚は、諸君が修身書を説くに於て何かする。(中略)

然らば則斯少年は世の花なり、家族に於ける快樂の天使、社会に於ける道徳の人形なり。砂漠と荆棘との旅行に似たる此の人世生活の苦を和ぐるものは、翻々たる斯少年の挙動、無邪気なる子女の虚心の外に何かある、故に曰く斯少年は愛すべしと。

富貴にも、名譽にも、情欲にも無縁で、「無邪気」「虚心」であり、

大人たちの「人世生活の苦」を和らげる「天使」「人形」としての「少年」。ここでの「少年」は、その未熟さゆえに、愛情ないしは愛玩の対象にまで昇華されている。

教育や保護のまなざしを超え、愛情の対象として謳いあげられる「少年」の姿は、第一七号「少年園に遊ぶ」(高橋五郎^{注22})にも見出すことができる。ここでは、「神聖」という言葉によって、「少年」の時間や空間が規定されていく。「少年」の時は「神聖なる芳期」であり、「利欲邪念等の世俗の黒雲」と無縁な「少年」の心もまた「神聖」であるとして、「少年の上に照る日は光耀も一層たちまさり、少年のまはりを囲む空気は殊に清く爽かに、少年の園に流る、泉は比ひなく澄わたり、少年の園に結ぶ菓実は甘味倍して美なり」と「少年」が徹底的に賛美される。禁欲的な「教育」の範疇からやや逸脱した、このような「少年」の背後には、キリスト教をはじめとする西欧文化からの影響が色濃い。

第四には、「少年」を取り巻く人々の存在がある。その最たるものが「朋友」「友人」であることは疑いないだろう。第一号「朋友ノ感化」(柴四朗^{注23})では、「年齒猶未ダ壮ナラス、智慮猶未ダ確タラス、才識猶未ダ發達セズ、思想猶未ダ深遂ナラズ、人事ニ當ルコト猶未ダ久シカラズ、世故ニ遭遇スルコト猶未ダ多時ナラザル」者として「少年」を位置付け、それゆえに「其境遇ニ依リ交友ニ依リ、善トナリ悪トナリ、君子トナリ小人トナリ、英雄豪傑トナリ賤夫劣奴トナル、特ニ赫如タル事実ナリ」と結論して、未熟な「少年」の未来を左右する「朋友」

の影響力を強調している。

今ハ則全ク一変シテ師弟ノ關係ハ頗ル淡然泊然トナリ、家庭ノ教養モ亦縱緩トナリ宏綽トナリ、心性啓発ノ天理ニ從テ自ら上達スルコトハ之レ有ル可シト雖、取りテ以テ模範トス可キモノニ至リテハ遂ニ闕如タルヲ免レザルナリ。

「朋友」の大切さが説かれる背景には、引用部分のような師弟関係や親子関係の変化、さらには不安定な社会の状況があるようだ。伝統的なものと近代的なものとの間で、人々の価値観が揺れていたことであろう。そのなかで、同年代の「朋友」が、「少年」の精神的なよりどころとして浮上してくる。第四号「少時ノ朋友」(西村正三郎^{注24})もまた、「人生ハ苦樂ノ浮沈セル大海ナリ」として、変動する社会の中で「常ニ吾人ノ心志ヲ鼓舞作興シ、吾人ノ不幸ヲ慰メ、吾人ト其感情ヲ交換シテ、常ニ愉快ノ泉ヲ湧出スルノ源トナル者ハ、唯二三親友」の存在のみ、と「親友」の価値を強調している。また、ユニークな例として、古今東西の偉人と動物との交流を紹介し、「智識の宝貨」「品行の模範」として、「少年」たちに動物の飼育を勧める、第一号の論説「動物界の朋友」(無署名^{注25})がある。

最後に、筆者の記憶を通して遡行的に見出される「少年」、回想的な存在としての「少年」の出現に注目しておきたい。例えば、先に引用した「壮士、青年、少年」(末兼八百吉)の冒頭において、筆者は「余

が七八年前に過ぎたる旅程に上り焉ある人」である「少年」読者に向かつて、「余は固より諸君を懐しく思ふものなり」と親愛の情を表明している。遡って見出された筆者の「少年」時代とその経験が、現在の「少年」たちに語りかける際の根拠として用いられていると言えよう。

第一五号「余をして再び少年たらしめば」(無署名)^(注26)の筆者もまた、「少年の往時を追想」することを糸口として、「少年」時代の意義とそこで獲得される能力や習慣の重要性を説き出している。

吾人が成長の後に及んで、頭を回らして少年の往時を追想すれば、実に茫然経過し来ることを悔ゆるもの多し。学ぶべくして学ばざる事、為す可くして為さざる事、累々眼前に横はりて、何が故にこれをばせざりしや、何が故に彼をば学ばざりしや、嗚呼当時此を為し置きたらんには、かゝる不便を感じまじきに、嗚呼当時彼を学び置きたらんには、此不利は免れたらんと、事物に接する毎に感ぜずんばあらざるなり。されば、余は今此に今日の少年諸子をして、亦成人の後、余が如き後悔を起さしめざらんが為め、余をして再び少年たらしめば此の如く此の如くせしものと偶然感に上るものを縷述して、諸子が目前の戒めとなさんとす。

以下、暗中での歩行能力の養成や、道具の使用術、草木や鳥の名称の学習や、游泳術の習得、早起きや日記帳の習慣などが、かつて「少

年」であった筆者からの願いとして列挙される。「我が親愛なる少年諸子は、実に開塾の時、培養の時、收拾の時に在るが故に、目下勤めて其脳理を開塾して万有の知識を培養し、以て事物を收拾するに怠らざるべし」というように、ここでもまた、教育される存在としての「少年」が強調されることは間違いない。けれども、項目毎に繰り返される「余をして再び少年たらしめば」という表現には、そうした教育的意図を超えて、過ぎ去ってしまった「少年」時代への懐かしさや愛着が包含されているように思われる。また、少年読者に語りかける際、「師」や「親」ではなく、もと「少年」の立場が選択された背後に、時間を超えた「少年」性とも言うべきものへの信頼や着眼を読み取ることは不可能であろうか。

＜4＞

一八八六(明治19)年、初代文部大臣・森有礼は「小学校令」「中学校令」「帝国大学令」を相次いで公布し、尋常小学校から帝国大学まで、一連の学校体系が整備されることとなった。「少年園」創刊の辞が、帝国大学から中学校、小学校へと順を追って「青年」や「少年」をクローズアップしていったように、帝国大学を頂点とする階梯が整備されるなかで、「少年」はまず、学校制度との関わりを通して表象されていく。

未熟さや友情の強調等、本稿で整理した「少年」の諸相には、木村直恵などがすでに指摘している「青年」的言説に通じるものが数多く

含まれている。近代的な「少年」概念が、「青年」概念から派生したものであるとすれば、それは当然のこととも言えよう。しかし、一方で、「少年」の持つエネルギーへの着眼や、回想や記憶を経由した「少年」への親愛・シンパシーのように、「青年」的文脈や「教育」的意図には容易に回収されない、「少年」観や「少年」像も散見される。続稿ではさらに、その後の展開を追ってみたい。

〈注〉

- (注1) 木村小舟『昭和少年文学史 明治篇上巻』童話春秋社、一九四九年二月、六二頁(のち『明治少年文学史 第一巻』として復刻。大空社、一九九五年二月)
- (注2) 瀬田貞二『落穂ひろい下巻』福音館書店、一九八二年四月、一二三頁
- (注3) 『少年園』の創刊以降、その形態を模した幼少年向き雑誌が地方でも相次いで出現する。その一部については拙稿「明治中期における幼少年雑誌出版と地方―愛知で創刊された『益友』を中心に―」(『国際児童文学館紀要』第九号、一九九四年三月、一一二頁)、「同(二)―岡山で創刊された『わらんべ』を中心に―」(『国際児童文学館紀要』第一〇号、一九九五年三月、一一三頁)を参照されたい。
- (注4) 桑原三郎「少年向きジャーナリズムの勃興」Ⅱ『百合児童文化』第二号、一九九〇年十一月、一九九頁
- (注5) 田嶋一「『少年世界』と明治中期の少年たち(3)」(『名著サブリメント』第三巻第五号、一九九〇年四月)、および「『少年』概念の成立と少年期の出現―雑誌『少年世界』の分析を通して―」(『國學院雑誌』九五巻七号、一九九四年七月)
- (注6) 木村直恵「『青年』の誕生―明治日本における政治的実践の転換―」

新曜社、一九九八年二月

- (注7) 木村小舟、前掲書、七〇頁。小舟は同書において、〈少年園〉欄の無署名論説の大半は、高橋太華と中川霞城の執筆であろう、と推測している。

- (注8) 「発刊の主旨を述べ先づ少年の師父に告ぐ」Ⅱ『少年園』第一号、一八八八年一月三日、(一)―(四)頁

- (注9) 「天長節を祝し開園の緒言とす」Ⅱ『少年園』第一号(前掲書)、一―三頁
- (注10) 連載を全体で一編とカウントした数。

- (注11) 田中登作「少年の時機」Ⅱ『少年園』第二号、一八八八年一月一八日、八一―一〇頁

- (注12) 「園話／第一回、身体の鍛練」Ⅱ『少年園』第二号(前掲書)、一―四頁
- (注13) 国府寺新作「現時ノ少年ニ望ム」Ⅱ『少年園』第二号(前掲書)、四―八頁

- (注14) 拙稿「もうひとつの〈東京遊学案内〉―明治二〇年代の幼少年雑誌に描かれた遊学少年たち」Ⅱ『児童文学研究』第二九号、一九九六年一月、九頁

- (注15) 「功名富貴の原野」Ⅱ『少年園』第七号、一八八九年二月三日、一―四頁

- (注16) 志賀重昂「日本少年の為すべき事業」Ⅱ『少年園』第七号(前掲書)、四―六頁。「同右(続き)」Ⅱ『少年園』第八号、一八八九年二月一八日、四―五頁

- (注17) 手島精一「少年園記者ニ謀ル」Ⅱ『少年園』第三号、一八八八年二月三日、七―九頁

- (注18) 「少年園の先途」Ⅱ『少年園』第五号、一八八九年一月三日、三―四頁

- (注19) 坪内雄蔵「少年の心に於ける『宇宙』の変遷、并ニ危険なる『宇宙』」Ⅱ『少年園』第三号(前掲書)、九―一四頁。「同右(前々号のつ、き)」

〔注20〕 『少年園』第五号(前掲書)、四一〇頁
『少年の気象』 〓 『少年園』第一〇号、一八八九年三月一日、
一〇三頁

〔注21〕 末兼八百吉「壮士、青年、少年/(其二)壮士」 〓 『少年園』第一
二号、一八八九年四月一日、三〇七頁。「同右/(其三)青年」 〓

『少年園』第一四号、同年五月一日、三〇九頁。「同右/少年」
〓 『少年園』第一五号、同年六月三日、五〇九頁

〔注22〕 高橋五郎「少年園に遊ぶ」 〓 『少年園』第一七号、一八八九年七
月三日、三〇五頁

〔注23〕 柴四朗「朋友ノ感化」 〓 『少年園』第一号(前掲書)、三〇六頁

〔注24〕 西村正三郎「少時ノ朋友」 〓 『少年園』第四号、一八八八年二
月一日、六〇一〇頁

〔注25〕 「動物界の朋友」 〓 『少年園』第一一号、一八八九年四月三日、
一〇三頁

〔注26〕 「余をして再び少年たらしめば」 〓 『少年園』第一五号、一八八
九年六月三日、一〇五頁。この巻頭論説は無署名で発表されたが、
山縣悌三郎の執筆である可能性が高い。山縣は同年五月、大日本
教育会議員として出席した愛知県教育会総集会において、同じ題
で演説を行っており、『少年園』への掲載と前後して全文が『大日
本教育会愛知部会雑誌』第二七号(一八八九年七月発行)に再録さ
れている。

(付記)

『少年園』の引用は、復刻版(不二出版、一九八八年一〇月)を使
用した。なお、引用中の旧字は適宜新字に改めるとともに、ルビ
や傍点、圏点は省略した。